

# 「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

## 「数字には説得力がある」

毎年、柔軟に就学先を見直すことができるようになり、保護者から学びの場を変更したいという要望が寄せられます。学びの場を変更するには、本人及び保護者の意見、子どもの実態、教育上必要な支援内容、地域や校内の支援体制の状況、専門家の意見等を参考に、保護者と合意形成を図りながら、総合的な判断をすることになります。ある事例を紹介します。

### 【小学校特別支援学級から通常の学級へ変更を要望したケース】

- 学校は保護者の要望に対して、ありのままの実態を知ってもらうために、通常の学級でお試し体験と保護者の参観、知能検査による実態把握を実施して判断することにした。
- 検査を担当した私のご両親に伝えたこと。
  - 1 検査の数値は、検査者のやり方や本人のその日の体調及び気分によって誤差が生じるため、全般的な知的水準を正確に推定することは難しいが、就学前に実施した発達検査に比べると大きな成長が認められる。それは保護者の頑張りと本人の努力に加えて、今の学びの場と担任との良好な関係性が本人のよさを引き出した成果である。
  - 2 (具体的に検査の数値を示しながら) 今回のIQは低いレベルであり、学年相応の学習を習得するのが難しい、初めてのことや変化が苦手である、記憶する量が少ない(記憶してられる時間も短い)、能力以上のことを要求されると不適応行動が出現しやすいなどの傾向が考えられ、学習意欲や自己肯定感の低下が予想される。
  - 3 可能な範囲で通常の学級で交流及び共同学習を継続し、子どもの強みを最大限発揮できる今の学びの場で、本人のレベルに合った課題を細かく、少なく、体験的な学習でゆっくり、丁寧に学ぶことが大切である。
- 説明後、父親は「(IQ)こんなに低いんだね。特別支援学級を否定的に捉えていたわけではない」と話していた。今後もサポーターの一人として支えていくことを約束した。
- 保護者は我が子のよさを引き出してもらえるように、特別支援学級継続を学校に伝えた。

保護者は学校の丁寧な対応と、検査の数値に納得して継続を希望された。改めて、数字には「説得力がある」と感じた。

特別支援学級担任には、いろいろな思いを抱えて入級を決断した保護者との連携力、障害特性の正しい理解とアセスメントの力、専門的な指導力(自立活動の指導、教科指導、教科等を合わせた指導、異学年の集団を一斉に指導する力)、校内の特別支援教育の推進役としての力を身に付け、本人及び保護者が「入級してよかった」と思える学級経営を期待する。教育の成果は、子どもの成長と笑顔、保護者との信頼関係の構築である。



### とれたて直送便



### 「目の色を赤で描いていたら、どう指導したらよいか？」～ある園からの質問～

お絵かきには、表現力を養う、情緒を安定させる、想像力を豊かにする、手指の巧緻性を高めるなどのねらいがあります。いずれ目は黒色、口は赤色と気付くので、それまでは子どもの自由な発想を大切にしようでしょうか。生きる力を育む育色では、色によい・悪いはありません。気になるようであれば、理由を尋ねたり、年齢に合わせたテーマで描いたりしましょう。音楽やお絵かきは知的過程を通らず、直接情動に働き掛ける力があります。教えるのではなく、質問を繰り返し、自由な発想で表現できるように導きましょう！